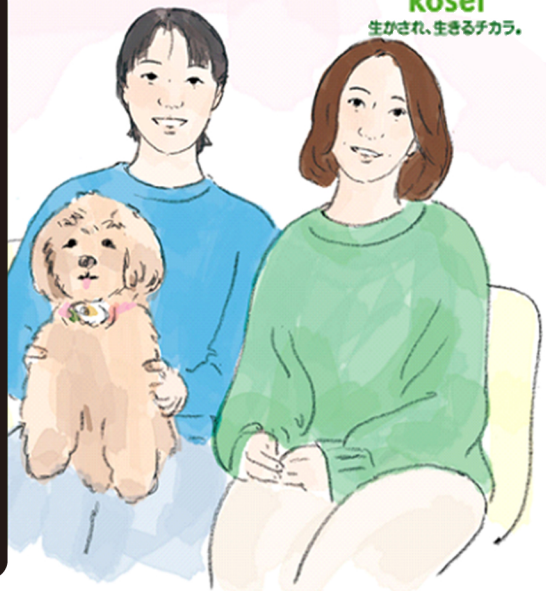
kosei
生かされ、生きるチカラ。

娘から学んだ幸せへの道しるべ。

津教会　辻本佳世さん

辻本佳世さんの母は多額の借金を抱えるほどの浪費癖があった。それでも仏教の教えを実践すればいつかは変わってくれると信じていたが、大動脈瘤解離を発症しあっけなく他界。何十年も苦しんだ母との葛藤を顧みて虚しさが残った。そんなとき、長女が交通事故に遭ってしまう。重傷の脚の痛みに耐える娘を目の当たりにし、加害者への怒りが込み上げた。しかし、長女からは「この事故は、私の人生を変えるためのものかもしれない、だから、誰のせいでもない。運転手さんを恨むのは違うよ」と、思いがけない言葉が返ってきた。長女は、事故をとおして自分を見つめ、この経験を生きる糧にしようとしていた。その言葉どおり、このときを境に勉強に打ち込み、志望校に合格。勉学や部活に励み、多くの友人をつくって学生生活を謳歌している。現象をとおして何に気づき、どんな学びに変えていけるか。それはまさに、辻本さんが学んできた仏教の教え〈苦をきっかけにして救われていく〉そのものだった。



慈悲の心で――忍辱②

「人の善悪（さが）　聞けばわが身を　咎めばや　人はわが身の　鏡なりけり」。良寛禅師の歌です。人の言葉や態度を見て、自分はどうだったかと省みる「人のふり見て我がふり直せ」ということわざに似た印象ですが、この歌は、「自分に対する悪口やほめ言葉を耳にしたら、それに怒ったり、のぼせあがったりしないで、自己のありようをよくよくふり返ってみよう」と、良寛さんが自身にいい聞かせているのです。こうしたふり返りが、おのずと心の波立ちを静める忍辱の実践になることを、この歌は私たちに教えています。

ある日のこと、つねづね良寛さんを妬ましく思っていた一人の僧が、泥だらけの酩酊状態で禅師を訪ねて来るや、自らの帯でいきなり良寛さんを叩きはじめたそうです。しかし、良寛さんはただ打たれるにまかせ、難が去った夕刻には、雨がしきりに降るのを見て、ひとこと「あの僧は、雨具をもっていただろうか」とつぶやいたそうです。耐えたり我慢したりするのではなく、ものごとや人を自然に受け入れる気持ちが起きるのが「忍辱」ですが、それに加えてこの話からは、慈愛もまた忍辱を実践するうえで大きな力となり、支えとなることがわかります。

立正佼成会
www.kosei-kai.or.jp Eメール：info@kosei-kai.or.jp　〒166-8537 東京都杉並区和田2丁目11番1号　TEL.03-5341-1615